

伊吾北通車師前部高昌壁、千二百里」といふものこれなり。只だ玉門陽關に至らずして、東の方安西より北西行するの差あるのみ。こゝに引ける唐書の「西域朝貢皆道高昌」といふものまた之なり。然も隋亂以前には焉耆より支那に至るには磧路なるもの存し、交通は重に之によりしが如く、此道閉塞せられて、爲に吐魯番を経由するもの多きに至りしを見る。而して茲にいへる磧路なるものは、之を隋以前支那と焉耆地方との通路に鑑むれば、略推知するに難からざるべし。今試みに二三の例を擧ぐれば、漢代貳師將軍が大宛を討つや、玉門を出て、「既西過鹽水」(前漢書李廣利傳)といへり。鹽水が鹽澤にして羅布泊たるべきや論なし。而してまた貳師の大宛に勝ちてより、「西域震懼、多遣使來貢獻、漢使西域者益得職、於是自敦煌西至鹽澤、徃徃起亭」(前漢書西域傳)と記せり、これ少くとも漢代玉門敦煌を西に出で、軍隊行旅共に羅布泊を經過して西域の北部に至れるものあるを示すものと云ふべし。晉代法顯西に行くや、先づ出で、鄯善の王都に至り、次で西北十五日にして烏夷國(或は僞夷國)に行けり。佛傳に烏夷烏耆等と記するもの、焉耆に當るべきは疑なし。鄯善の位置は時代によりて同じからず羅布の東方一帯を悉く其地となすことあれども(前記後漢書の如し)其都は羅布の南に位し、之より焉耆に至らんとすれば、必ず泊の附近を通過せざる可らざるは明かなり。唐書に此地方の道理を記して曰く、「自沙州壽昌縣西十里、至陽關故城、又西至蒲昌海南岸千里、自蒲昌海南岸、西經七屯城、漢伊修城也。又西八十里至石城鎮、漢樓蘭國也、亦名鄯善、在蒲昌海南三百里」と(卷四十三下地理志)。これ即ち漢代以來羅布泊地方に通ずる道路にして、大體に於て今瑪海戈壁ゴビを通ぜる駝道と一致するものなるが如し、これより南道を西せんとするものは、鄯善より更に西に向ひて于寘の地方に至り、而して焉耆地方に向ふものはまさに泊の一流コンチダリアの流域地方を西北に辿りしに外ならざるべし。晉書西戎傳焉耆國